

意識が戻る。

瞼を開く。

淡い七色が飛び込む。

起き上がる。

立ち上がる。

見上げると、天は七色。

ここはどこか。

どこでもない。

私は誰か。

誰だろうね。

天の七色は刻々と模様を変え。

どこまでも続く大地は無のように白く、果てがない。

風が思いのままに吹き抜ける。

身に纏った白い衣がたなびく。

南風 こまち

私はもう戻れないと知った。

あなたのとこにに戻れないと知った。

棒よ、そこにあれ。

だから私の右手には、長い棒が。

織物よ、そこにあれ。

だから私の左手には、白い織物が。

もう戻れないのなら。

もう会えないのなら。

それでも、私は想いを捨てない。

だから私は旗を振る。

河の向こうに届くように。

だから私は旗を振る。

頑張れって、あなたに届くように。

私は手を休めない。

いつか、あなたの灯台になるから。

私は手を休めない。

いつか、あなたの道標になるから。

流星が河を飛び越す。

地平の果てに消える。

あの星は、きっと。

きっと、私が遺した命になる。

旗は、天を目指す。

「後は頼んだよ、あなた」

白い旗が、天の七色に染まっていく。

白い衣が、天の七色に染まっていく。

たとえ、私が天の一部になろうとも。

私はここで旗を振り続ける。

あなたが眠るその日まで。

この七色の天の下で。